土方巽
舞踏
大解剖
VI
NAKANOSHIMA

万博から四十一年。
よみがえれ！土方巽。

HIJIKATA '68–'70–'72

2011年8月6日［土］14:30〜18:30［14:00開場］
大阪大学中之島センター 7F 講義室3　入場無料

The Great Anatomy of Hijikata Tatsumi's Butoh VI
HIJIKATA '68–'70–'72
Osaka University Nakanoshima Center　7th-floor Room 3　August 6th, 2011 14:30–18:30　Admission Free

プログラム

映像上映：舞台の土方巽
「肉体の叛乱」（1968年、撮影：中村 宏）
「疱瘡譚」（1972年、監督・撮影：大内田 圭弥）

トーク＆上映：万博映画の土方巽
森下 隆（慶應義塾大学アート・センター 土方巽アーカイヴ）
小菅 隼人（慶應義塾大学 理工学部 外国語総合教育教室）

特別上映：「万博映画の土方巽」
（1970年日本万国博覧会 みどり館 上映作品「誕生」より）

土方巽 舞踏 大解剖 VI　NAKANOSHIMA

HIJIKATA '68 – '70 – '74

アクセス［大阪大学 中之島センター］

京阪中之島線 中之島駅　徒歩 5 分
〒530-0005 大阪市北区中之島 4-3-53　06-6444-2100
http://www.onc.osaka-u.ac.jp/

お問い合わせ

慶應義塾大学アート・センター　Project Rebirth（本間、森下）
03-5427-1621　homma@art-c.keio.ac.jp
Web: http://www.art-c.keio.ac.jp/
Twitter: http://twitter.com/rcaaa　[#HTrebirth]
Facebook: http://www.facebook.com/rcaaa.keio

主催　慶應義塾大学アート・センター
ポートフォリオ BUTOH（慶應義塾大学 DMC 研究センター）
大阪大学大学院 文学研究科 演劇学研究室
企画　Project Rebirth
協力　NPO 法人舞踏創造資源、株式会社五藤光学研究所
株式会社 IMAGICA
特別協力　株式会社みどり会
助成　独立行政法人日本万国博覧会記念機構

1970 年をはさんで、1968 年 と 1972 年は土方巽の舞踏にとって、きわめて重要な年である。1968 年の舞踏公演《土方巽と日本人》はそれまでの舞踏を総括する BUTOH であり、1972 年の舞踏公演《四季のための二十七晩》はその後の創造行為を方向づける BUTOH であった。

土方巽 舞踏大解剖 VIでは、土方巽の舞踏史のメルクマールとなった 2 公演の記録映像「肉体の叛乱」と「疱瘡譚」を上映する。そして、そのはざまの 1970 年、大阪万博でのみどり館、アストロラマとして上映された「誕生」から土方巽の出演シーンを特別上映する。

1970 年以来、一度も公開されず幻の映像となっていた映画「誕生」。調査プロジェクト「Project Rebirth」の活動によって再発見された 70mm 上映フィルムから、ついに北海道ロケにおける土方巽の貴重な映像がよみがえる。

みどり館 外観

硫黄山での撮影

アストロラマ ドーム

撮影 : 長谷川 六

撮影 : 小野塚 誠

土方 巽　（ひじかた・たつみ／ 1928 ～ 1986）

秋田生まれ。秋田工業学校を卒業後、故郷秋田で江口隆哉門下の増村克子のもとでダンスを始め、ノイエ・タンツを学ぶ。

1948 年に初上京後、秋田と東京を行き来し、浮浪の 10 年を経て「舞踏」を発見する。そして、ジャン・ジュネへの共感とジュネの影響がもとになった作品「禁色」の発表（1959 年）を契機にモダンダンスと訣別、アヴァンギャルドとエクスペリメントを標榜し「暗黒舞踊」として公演活動を展開する。

こうして 1960 年代に、三島由紀夫、瀧口修造、澁澤龍彦らの支持を得て、大野一雄、笠井叡、石井満隆、高井富子、芦川羊子らを擁し、河原温、加納光於、赤瀬川原平、中西夏之、横尾忠則ら前衛美術家とのコラボレーションにより、ダンスに尖鋭な表現をもたらす実験的なダンスを追求する。

そして、1960 年代のアンダーグラウンド芸術の先駆者として、〈肉体の叛乱〉以後、劇映画に出演し、雑誌や新聞などのメディアにも登場し、広く文化的関心を集める。

1970 年代には、革新的なメソッドの構築とともに、土方の舞踏は「舞踏譜の舞踏」として深化を遂げる。さらに、土方による、日本的身体や東北の風土を特徴づける新たなスタイルの創造とともに、大駱駝艦など多様な「舞踏」がダンス表現として展開され、1980 年代における海外への舞踏の流出を促した。

土方巽の舞踏創造の原点やその舞踏概念を生んだ身体思想は、『土方巽全集 I・II』に収められている「病める舞姫」や「美貌の青空」の一連の文章に見出すことができる。

〈肉体の叛乱〉1968 年

舞踏〈肉体の叛乱〉によって、土方巽はアンダーグラウンドの世界の寵児となり、1968 年＝反乱の年における思想・文化上のシンボル的存在となった。暴力とエロティシズムの〈肉体の叛乱〉は、1968 年というゲバルトと昭和元禄で象徴される年に見合う特権的地位を得ることになる。

もともと「肉体の叛乱」という作品はなく、「土方巽と日本人」という舞踏作品として始まった。〈肉体の叛乱〉は、アジテーションのごとき種村季弘の文章「肉体の叛乱」に由来する。

種村の文章には、大学闘争も街頭デモも登場しない。しかし、暴動の予兆を一個の馬鹿王の存在に見出している。その白痴にして畸形の男がこの日常を攪乱するとき、その動きが舞踊となり反乱となるとして。

土方巽は、そのアジテーションに導かれるように、馬鹿王となって日本青年館に登場した。豚や兎やアメン棒を背負った男を従えた土方は、白い振袖衣裳に身を包み、長髪を揺らし、輿に乗って劇場に現われた。

そして、舞台に立った土方はもはや馬鹿王ではなく、魔王の形相で観客を見返し、断食で贅肉を殺いだ鋼の肉体を痙攣させ、真鍮板に肉体をぶつけて狂気に没入し、ヘルマフロディットの倒錯した踊りを繰り広げ、果てはキリストとなって観客の頭上高く宙吊りとなった。

馬鹿王のページェントからキリストの昇天まで、その間に、めくるめくダンスシーンが続き、見る者を圧倒した。まさに、土方巽にとって 60 年代の舞踏を総括する一大イベントであった。

〈疱瘡譚〉1972 年

1968 年当時、「身体」という言葉は流通していなかった。もっぱら「肉体」という言葉が現場を支配していた。日本ではまだサルトルの「実存主義」が生きていたのである。

しかし、メルロ＝ポンティの身体論を始めとした構造主義に代表されるフランス現代思想の輸入（翻訳）が始まり、1970 年代に入ると日本の思想界を席巻する。

1972 年には、土方巽は《四季のための二十七晩》と名付けた舞踏公演で、全く新しい舞踏を紡ぎ出す。27 日間連続公演という驚異的な事業は、連日満員という熱狂と賞賛によって応えられ、土方は舞踏のみならず、1960 年代以降の日本におけるアングラ芸術を鷲摑みにして、一気に新たな転換を果たしたのであった。

作品のモチーフや表現のスタイルの変貌は、土方の舞踏をよく知る観客を瞠目させた。土方の絶えざる革新精神の発露であり、その根底には、身体をめぐる思想、舞踏の発生学、そして何より「舞踏譜の舞踏」という絵画から発想したイメージ＝言葉＝記号をベースにした舞踏譜に基づく新たなメソッドが内在していた。

土方巽は《四季のための二十七晩》の最初の作品〈疱瘡譚〉で、もはや舞台に屹立するのではなく、舞台上に腰を落とし、仰臥し、這いつくばり、立つことのない踊りに四肢を震わすことになる。その「実存」の痙攣にも見えた踊りが、その後の土方の舞踏の核心になり、「肉体の消滅」や「衰弱体」というアポリアの始まりとなる。

舞踏は新しいだけでなく、大いなる広がりを獲得してゆく。〈疱瘡譚〉は、その後、世界の舞台芸術の一潮流となる舞踏＝BUTOH の嚆矢として、舞踏の記念碑ともいうべき作品となった。